

同時開催
第6回水の郷
シンポジウム

美郷大使鼎談

10

月26日に美郷町公民館で、第3回美郷大使鼎談「水と森と私」が開催され、松田町長を進行役に、美郷大使である町田睿さん、佐々木毅さん、永田萌さんが意見交換を行いました。大使の皆さんからどんな提言があったのか、鼎談の内容をご紹介します。（一部抜粋および編集）

水との関わり、 水への思いについて

永田大使（以下、永田）：私は兵庫県の

内陸にある加西市で生まれ育ちました。加西市にも豊かな田園地帯がありますが、本当に水に苦労をするところでした。水の確保のために今でも千ほど残るため池が美しい水の風景をつくり、観光資源になっています。小さいときから「水を大切に」と言われ、水道の出しっぱなしなんて考えられないことでした。

私は川というものをよく知らない環境で育ちました。中学一年生のころに市川という川を見に行つて橋の上から川の流れを眺めていると、一本の黄色いチューリップが流れてきて私の方に近づき、橋の下を通つてはるか遠くへ消えていきました。その時は何となく

見ていたのですけれども、後日、学校の古典の授業で、鴨長明の方丈記の「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」を聞いたときに、あの光景がぱっと浮かびました。水はとうとうと流れていますけれども、決して同じ水ではないのです。先生が「鴨長明はこれを時の流れ、人間の人生に例えている」とおっしゃったときに、子ども心に哲学的な悟りを開きました。以来私は時間と水とを重ねて考えるようになってきました。

ごく最近、愛媛県の西条という町の秋祭りを見に行きました。西条も水の町で、水道代が無料だそうです。豊かな湧水に恵まれ、お祭りの山車^{だし}を追いかけていくと自然と湧水に出会うという、とてもよい体験をしました。私は西条の町の人たちに、美郷町の方をもっと自然に囲まれていて大きな湧水だという自慢を、まるで我がふるさとの

ようにしてきました。西条の方々から「ただ水が湧いていてありがたいというだけではなく、この水の恵みを現代にどう活かしていくかが課題です」というお話がありました。

佐々木大使（以下、佐々木）：千屋出身の私にとって、子どものころに感じた水に対する意識は二つあります。一つは農業用水です。田んぼにはたくさん水が入り用です。私が小学生のころはあまりいい川がなく、川のせきを止めて泳ぎ、怖いおじさんに怒鳴られたことがよくありました。水が農業、特に稲作りとの関係でいかに大事かということ、子どものころから思

い知らされたわけです。もう一つは生活用水です。水道がなかったものから、山からくる水と井戸で生活をしていました。「いたずらして、水の源をますぐするな」ということをうるさく言われました。「この水は、みんなが飲んで、御飯を炊いて生活しているのだから、大切にしなければいけない」と。その後、水道が普及するなど水を取り巻く環境が随分変わったと思います。何といつてもシヨ

ックなのは、水を買って飲むようになったことです。「時代」というものを改めて感じさせられた大きな変化だと思います。

しかしこれは外国へ行けば当たり前のことで、水をただで出してくれるようなレストランはどこへ行つてもありません。ヨーロッパでも飲んで胃腸が大丈夫な水道水なんてほとんどないぐらいで、レストランに行つても水を買つて飲むのは当たり前です。それが次第に日本人に逆流し、水を買って飲む人たちが増えてきたということは、水に対する我々の評価や考え方が世界的な潮流に沿って動いていることもあるのかもしれない。「水の郷としてはこれをどう考えるのか」というのも、一度皆さんで議論したら面白いのではないかと思ひます。

町田大使（以下、町田）：佐々木大使のお話にあつたように、これからは「水と空気はただ」とはいきません。中国が大気汚染で大変な状況です。北京だけではなくて、ハルビンなどでも冬は石炭をたくと本当にすさまじい煙で町が覆われてしまひます。水に関しては、中国は日本の25倍の広い国土で大きな川が何本も流れていますが、その水の色は赤か黄色がほとんどで、8割が飲めない状況にあります。「水と空気のリベンジで自然の恵みが崩壊するのではないか」と心配しています。

今年、富士山が世界遺産に選ばれましたが、富士山には川がありません。ほとんどが伏流水で水の山と言われ、

まちだ さとる 町田 睿さん

昭和13年、旧千屋村生まれ。東京大学法学部を卒業後、富士銀行に入行。同行常務取締役を経て、平成7年に庄内銀行代表取締役頭取。平成21年から北都銀行取締役会長ならびにフィディアホールディングス取締役会議長。千葉県在住。



ささき たけし 佐々木 毅さん

昭和17年、旧千屋村生まれ。昭和48年に東京大学で法学博士の学位を取得。東京大学法学部教授、同大学院法学政治学研究所長兼法学部長などを経て、平成13年に東京大学総長に就任。平成17年、紫綬褒章を受章。日本学士院会員。東京都在住。



なが た もえ 永田 萌さん

昭和24年、兵庫県生まれ。絵本作家。花と妖精をテーマとした夢あふれる作風で、絵本やエッセイなど140冊を超える著書を発表。平成21年には美郷町学友館で特別展を開催、合併5周年記念式典では記念講演を行うなど美郷町とのゆかりも深い。元兵庫県教育委員会委員長。京都府在住。



森との関わり、森への思いについて

豊かな地域資源になっています。甲斐の酒、山梨県のおいしいお酒はほとんどが富士山の伏流水によるものです。皆さんも存じのようにワサビの里でもあり、また、甲府で大変おいしい豆腐ができるのも、水処理のせいだと伺っています。そのほか、河口湖でニジマスも随分と養殖に力を入れ、地元産業になっていくようです。そういう意味で「今後、水をどう活かしていくのか」ということが、水で有名な美郷町にとっての大きな課題になるのではないか」と思っています。

町田・森と水との関係性は強く、森の保水力は大変なものだと思います。この関係性を理屈っぽく言うと、森に降った雨が、河川という形で流れるという形態。木に降り注いだ雨が蒸発散散することを通じてまた繰り返されるという形態。それからもう一つ、雨が地下に浸透して湧き水になるといふ、三つの形態があるそうです。幸いなことに日本は山国です。国土

に占める森林の割合は世界平均が31%ですが、日本の場合68・5%もあり、7割近く森林に覆われているということです。

日本列島は南北へ非常に長く、北と南で森林の木の種類が違います。私どもの北方はブナに代表されるような保水力の非常に高い木が多いのですが、ブナのような広葉樹と針葉樹、いろいろと交じり合いながら森を育てるといふことが必要だろうと思います。「森は海の恋人」といったスローガンがあります。これは岩手県のカキの採れるところでよく言われるフレーズです。森が痩せるとカキが育たないのは、河川で運ばれる栄養素の高い水がなくなることが大きく影響するのだろうと思います。

「森林はほっとしているだけでは駄目なのではないか」「我々、恩恵を受けている人間が、森をどう丁寧に保存していくのか」が非常に大事なテーマになりつつあると感じています。「水の恩恵を考えることは、同時に森林の保全を考えること」ではないかと思えます。

佐々木・私は公益社団の国土緑化推進機構の理事長に就いています。先ほど町田大使からお話があったような森林について仕事の関係で目にするのが多く、少しお話をさせていただきたいと思っています。

T P Pが問題になっていますが、木材については昭和30年代に完全に輸入自由化してしまいました。当時は高度

成長で住宅需要が盛んになり、国内の木材の価格が高騰して「山があれば勉強しなくてもいいな」と子どもながらに感じたほどでした。ものすごいスピードで高騰したため、これではいろんな意味で経済がもたないと、当時の農水大臣の河野一郎さんが完全自由化に向けて解除したという経緯があります。輸入問題は全く関係ないという意味で、先ほど話をした稲の話とは状況が真逆さまに違ってきます。外材が入ってきて、国産材の活用にもむしろ問題があるということですね。

今は、年々木が大きくなる分ですえも国内では使い切れない状況になっています。森林率68・5%のポリュームがどんどん増えて使い切れないのももちろん、少し輸出するということもありですが、実はこれは産業構造から見ても大きな問題を抱えていると思います。

木を適切に使うことは、同時に森林の荒廃を防ぐための産業的な基盤を整備することにもつながります。これは水資源の保全においても大変重要なこととです。林業の問題というのは、森林のいろんな機能を考える上で、美郷町も含めて真剣に取り組むべき課題の一つではないかなと思っています。

二つ目は、水を買うようになったという話に関連しますが、今から30年ぐらい前に水源税という問題がありました。「水を使う人は税金を払え」というテーマになったことがあります。「水は非常に大事な資源であり、それを使